

# 伊藤光中の『とりかへばや』研究

——桃園文庫本・静嘉堂文庫本を中心として——

新 居 和 美

はじめに

現在、『とりかへばや』についての最初の注釈書として知られているのは、岡本保孝の『とりかへばや物語考証』である。これは物語中の詞に関する注釈、『風葉集』所載歌、年立、系譜から成っており、詳細な注釈内容とはいえないものの初めて纏められた注釈書として「研究史上特筆さるべきもの」と評価されている。しかし、現存する『とりかへばや』の写本の中には、『とりかへばや物語考証』よりも以前に書かれたもので、本文の他に提要・年立・系図等を付載する写本が存在するのである。

それは、東海大学付属図書館蔵桃園文庫本(以下、桃園文庫本と称す)で、第一冊目の巻一が散逸しているが、第二・三・四冊と、提要・年立・系図および『物語拾遺百番歌合』と『風葉集』所収歌が纏められた別冊一冊の計四冊が現存している。まず、別冊の序文をあげる(印は原文の改行を示す。傍線は稿者)。

なかむかしのころさかりに世にもてはやしゝものかたりふみと  
／いふものはいつ<sup>よ</sup>のほとより作りそめけるにかあらむ竹取うつ  
ほを／おやとしてそれかつきくいとかすおほかれとみな同じ  
おもむき／なるのみにてこれこそはと目さむはかりなるはすく  
なきをこの／取かへはやといへるなむよにもめつらかに一ふし  
ある作りさまにはあり／ける此物語もとは二くさありけるかは  
しめのははやくほろひうせて／今の世に残れるは後にいて来し  
今とりかへはやのかたなりとは風葉／集にのせし哥ともにてし  
られたりかく今まで残りつたはれる／はいとめてたけれどとうつ  
しまきのならひいたくあやまりおほく／よみときかたきふし  
くおほかれはあかぬ事に思ひて十年はかり／さきつかたより  
これかれあまたの本ともかうかへあはせつゝあまれる／をけつ  
り脱たるをおきなひなとからうして今は大かたにはよみ心得／  
らるへくなりにたれはうひまなひの人のために引哥や何やと傍  
に／頭にかきくはへ系圖年立などをさへに作りそへておのれに  
つきて／物まなふ人又さらぬよそ人たちにも見すへきさまにな  
しをへ／つるは天保四年といふとしのふつきたなはたまつるま  
への日

つたのやのあるし 藤原光中

傍線部②③から、この桃園文庫本は「つたのやのあるし 藤原光中」なる人物が天保四年(一八三三)七月六日に書き終えたことがわかる。『とりかへばや物語考証』は「安政五年一月十一日、燈火に

筆をさしおく<sup>3</sup>」と記されているから安政五年（一八五三）の成立で、実に岡本保孝より二十五年も前に藤原光中は『とりかへばや』に關する年立・系図類を纏めていたことになる。傍線部①によれば、多数の本を校合し校訂を加えたいらしい。当時、版行されず注釈書もなかった『とりかへばや』について初めての注釈書現存する本文には多数の頭注傍注が付されているとも言うべき校訂本を完成させた光中の業績は大きいだろう。そこで本稿は「つたのやのあるし」藤原光中<sup>4</sup>に焦点をあてる。藤原光中がどのような人物なのか、『とりかへばや』に対してどのような業績を残したかを可能な限り探ることにより、『とりかへばや』享受史の一端を明らかにしたいと考える

#### 一 光中が関わった写本

現在までに存在が知られている『とりかへばや』の写本は百本を超える。その中で「つたのやのあるし」という号は、桃園文庫本以外にも静嘉堂文庫四冊十行本<sup>5</sup>（松井文庫本D）（以下、静嘉堂文庫本と称す）の奥書にも見られる。

文政八年酉八月以兩本校加併案了

絡石舎主人

同十年亥九月以異本對校且以泊泊舍翁藏本異同注了

一本奥書雅望自筆本

登利加邊婆也四卷借橘千蔭藏本而謄寫之

寛政十二年庚申正月

石川雅望

文政十二己丑年二月以森嘉基校本對校畢

森本奥書

右とりかへばやの物語四卷は蓬萊氏の本をかりて写しとり校合をもへぬ

天明五年乙巳正月十日

本居宣長

右鈴屋大人の御本もてうつつしぬ

加藤磯足

文政三年十二月校合畢傍注もいさゝか書加ふ

醉月園嘉基

文政四年正月廿日校合をへぬ

千無羅仲雄

かくあれと校合書入は嘉基自筆と見ゆ

文政十二己丑年十月以兒玉氏校本<sup>6</sup>比較了

以上が静嘉堂文庫本の奥書であるが、これを見ると、静嘉堂文庫本は「絡石舎主人」が文政八年（一八二五）から文政十二年（一八二九）までの五年間に複数の写本を用い、校合加筆を行ったものであることがわかる。

さて、ここで考慮すべきは、この「絡石舎主人」は誰なのかという点である。桃園文庫本の場合、「つたのやのあるし」の後に「藤原光中」と名が明記してあるから疑うべくもないが、静嘉堂文庫本の場合は「絡石舎主人」と号しか記されていない。『国書人名辞典』等の人名辞書類から「絡石舎」を引くと、「藤原光中」の名ほどの辞書にもなく、「長沢伴雄」の名だけが挙がる。長沢伴雄の生没は文化五年（一八〇八）から安政六年（一八五九）<sup>7</sup>であるから、時期的に見て静嘉堂文庫本を校合することは可能となる。このため、奥書だけで

は「絡石舎主人」の特定ができないが、写本内の注に注目すると特定するための判断材料が見られる。桃園文庫本巻二・巻三の頭注には、  
あまえて

俗にいふと直しさて言のもと甘にて元ははたらかせ形容した

る詞と見ゆそばえいろえなどのえと直し猶くはしくはつたの落葉初稿にいへり(巻二 三十二丁表)

\*初稿の「初」の字は削られている(傍線は稿者。以下同じ)。

うつたへに

此詞万葉集をはじめ土佐日記かけろふ日記其外<sup>にも</sup>後のものにはい

と多く見えてひとへにの意といひひたすらにといふに同じなと

其外にもくさくいへれとよくあたれりともおほえすさてうつ

は現たへはてといふに同じく其状をいふ詞にてうつとさまにの

意なるへし猶くはし「き考」はつたの落葉の「初」稿にいへり

(巻三 二十五丁表)

という注がある(文字上の「」は見せ消ち部分を示す。以下、同じ)。

これにより、「つたのやのあるし 藤原光中」には『つたの落葉』な

る著作があつたことがわかる。そして、静嘉堂文庫本巻一にも、

光中按 しどけなくにてなほそへたる詞なるへしあらけなくい

わけなくなくはしたなくのなどとし(中略)旧説とも皆ひかこ

と、聞ゆくはしくは絡石の「落葉の初稿にいへり (巻一 七

丁裏)

と「光中」の名とともに桃園文庫本と同じく「絡石落葉」という書名が見える。これだけでは光中説を引用したとも取れるが、さらに静嘉堂文庫本には巻一から巻四全体にわたって「初<sup>ねじけ</sup>」というように語句の傍に「初」という漢字とその語句の頭文字をカタカナ

一文字で記すという組み合わせの注が多数見られる。これらも、例えば『絡石の落葉』の初稿のネの項目に詳しい記載があるというように「絡石の落葉」での掲載場所を示したものであると解釈できる。

これらのことにより、桃園文庫本と静嘉堂文庫本の「つたのやのあるし」「絡石舎主人」は同一人物、つまり藤原光中であると云えるだろう。

## 二 静嘉堂文庫本奥書の流れ

続いて、光中の業績を明らかにするため静嘉堂文庫本の奥書の流れを確認していきたい。静嘉堂文庫本は巻一見返し部分から遊紙までの『とりかへばや』成立年次等に関わる書入や、上部・行間に書入がことに多いことなどから「比較的研究業績の少ないこの物語の研究資料としては最も貴重なものゝ一つである」と早くから評価されてきた写本である。しかし、いまだ翻刻もされず研究は進んでいない現状にある。このことを考えても奥書を今一度詳細に確認しておくことは無益ではないと思われる。

先に示した静嘉堂文庫本の奥書を見ると、墨および朱で四度の校合が行われたことが記されている。まず最初に奥書一行目には朱で、

文政八年酉八月以兩本校加僻案了

緒石舎主人

とあるから、光中は文政八年(一八二五)に二本の写本を用いて校合し、注を施したことがわかる。この一行からは、光中がすでに『とりかへばや』の本文を書写した後、或いは底本とする写本を手に入れた後に文政八年に二本の写本を用いて校合等を加えたとも解釈できるし、文政八年に二本の写本を校合しつつ、『とりかへばや』の本文を書写したとも解釈できる。しかし、校合の経緯を詳細に記していることから見て、前者であればその旨を記したのであるうから、後者の可能性が高いと考えたい。また、この時の校合に使われた二本のうちの一本が奥書三行目から始まる石川雅望筆の写本であると考えられる。

一本奥書雅望自筆本

登利加邊婆也四卷借橋千蔭藏本而謄寫之

寛政十二年庚申正月

石川雅望

この三行からは石川雅望が寛政十二年(一八〇〇)に橋千蔭藏本を謄写した本であることがわかる(この「寛政十二年」の箇所は、「十二」の部分だけ墨で重ね書きされている。よく見ると「十二」の下には「十三」という数字が見えるため最初は「寛政十三年」と書かれていたと思われる)。静嘉堂文庫本は、校合の経緯が実に十四行にも渡り記されているのだが、その中、この三行だけがことに大きな字で、『とりかへばや』本文と同じくらいの大きさで書かれている。さらにこの三行が墨で書かれていること、書き始めが「一本奥書」とな

っていることから「兩本」のうちの一本ではないかと推察できるのである。つまり、一行目に「以兩本校」とあることから、光中は二本の写本を校合しつつ本文を書写し、一方の写本にあった石川雅望の奥書を本文に続けてそのまま書写したのではないか。その後、後の校合の経緯を空いた場所に書き示していったため、このように奥書の順序が入れ替わってしまったのではなからうか。そのために「一本奥書」という書き始めになっており、他の奥書部分よりこと大きな字になっていると思われるのである。

続いて、奥書二行目に墨で、

同十年亥九月以異本對校且以泊泊舎翁藏本異同注了

とある。二度目の校合は文政十年(一八二七)九月に「異本」を用いて対校し、さらに泊泊舎(清水浜臣)藏本を用いて校合注を付したことがわかる。静嘉堂文庫本には異本を示すと思われる「イ」という墨の校合跡と、清水浜臣藏本を示す「泊」または「ハ」という文字を有する校合跡と注記がある。

続いて、三度目の校合は朱で記されている。

文政十二己丑年二月以森嘉基校本對校畢

森本奥書

右とりかへばやの物語四卷は蓬萊氏の本をかりて写しとり校合をへぬ

天明五年乙巳正月十日

本居宣長

右鈴屋大人の御本もてうつつぬ

加藤磯足

文政三年十二月校合畢傍注もいさゝか書加ふ

文政四年正月廿日校合をへぬ

酔月園嘉基  
千無羅仲雄

かくあれと校合書入は嘉基自筆と見ゆ

光中が文政十二年（一八二九）二月に校合に用いたのは、本居宣長から千無羅仲雄（千村仲雄）までの奥書を持つ写本であったことがわかる。最後に付け加えられている「かくあれと校合書入は嘉基自筆と見ゆ」の一行は光中の考えが書かれている部分であろう。それとこの酔月園嘉基（森嘉基）の校合が文政三年十二月で次の千無羅仲雄（千村仲雄）の校合が文政四年正月廿日であるから、この間は約一ヶ月程の期間しかないことになる。さらに、千村仲雄は森嘉基と同じく本居春庭に学んだ同門であり後輩であることを考え合わせると、千村仲雄は新たな写本を用いて校合したのではなく森嘉基の校合の確認作業を行ったと解釈できるのではないが、おそらく光中はそう考えたために「かくあれと校合書入は嘉基自筆と見ゆ」という一行を付け加えたと思われる。この三度目の校合および加注は、静嘉堂文庫本に「森」という文字で記され数多く見られる。

続いて、四度目の校合も朱で書かれている。

文政十二己丑年十月以兒玉氏校本伊勢網代氏門人比較了

文政十二年（一八二九）十月に、「伊勢網代氏の門人」である「兒玉氏」の校本を用い校合を終えたところ。この一行に記された写本は、今までに報告されている『とりかへばや』写本の奥書には見受けられない。よって「兒玉氏」と「伊勢網代氏」の手がかりはこの一行

のみとなる。本稿では、この「兒玉氏」を兒玉尚高、「伊勢網代氏」を足代弘訓だと見ておきたい。静嘉堂文庫本文にはこの時の校合を示す「児」という校合跡が見られる。

静嘉堂文庫本は文政八年から十二年までの五年間に、六本ないし七本の写本を用いて四度の校合を行ったものであることがわかる。今までに報告されている『とりかへばや』諸本の中でも最も多種類の校合跡および注記が残されている写本の一つだといえるだろう。

さてここで、先に引用した桃園文庫本の序文に再び目を向けたい。その傍線部①には「十年はかり／さきつかたよりこれかれあまたの本ともかうかへあはせつゝあまれる／をけつり脱たるをおきなひ」と書かれてあった。また、桃園文庫本は天保四年（一八三三）に完成したとあるから、光中はおよそ十年程前の文政七年（一八二四）頃から多くの写本を見て校合を始めたということになる。静嘉堂文庫本の最初の校合が文政八年（一八二五）であるから、「十年はかりさきつかた」という記述と見事に一致する。つまり、光中は静嘉堂文庫本に複数の写本による校合および注を書き写し、さらに自分の「僻案」を加えて、天保四年（一八三三）にそれまでの研究の集大成ともいえる桃園文庫本を著したと考えられるのである。そのため、桃園文庫本の本文は静嘉堂文庫本にある多数の校合跡を有している。光中が最適だと思った校合結果を選択して本文を校訂しているのである。注についても書写した注をそのまま書き写すのではなく、明らかに考慮を加えたと思われる箇所も見受けられるし、注の数自

体も取捨選択されていることがわかる。

### 三 伊藤光中について

さて、次に藤原光中自身に目を向けてみたい。まず、辞書類の記す光中についての記述を挙げる。光中は桃園文庫本の序文では「藤原」氏を名乗っているが、本来の姓は「伊藤」であったようだ。

伊藤光中いとうみか 国学者 (生没) 生年未詳、天保五年(一八三四)七月八日没。(生没)名、光中。通称、猪十郎。(経歴)上野国沼田藩士。清水浜臣の門人。

〔著作〕新撰字鏡捷見(文政六)

これは『国書人名辞典』の記載であるが、あまり詳しい記述とは言い難い。この他には『名家伝記資料集成』に江戸住であったことと『大江戸倭歌集』に和歌が一首入っていることが載せられているのだが、やはり詳しい説明とは言い難い。また、伊藤光中に関する論文に丸山季夫氏の「清水浜臣の朝敵辨」がある。この中で丸山氏は、静嘉堂文庫本『とりかへばや』に「光中按」という注があること、清水浜臣の『朝敵辨』に光中が書いた「朝敵辨抜粋」という記事が見えることを挙げて次のように述べられている。

私は又浜臣が松平楽翁の歌を評した「賢歌愚評」の写本を蔵してゐるが、此にも頭注があつて、光中按にとある。(中略)其中に、間有光中按云々不知為何人亦似非凡眼と云つてゐる。

既に其の名は慶應時代になると知れなくなつてゐる事が分る。

伊藤光中はやつぱり一向わからぬが、上州の郷土史家方々の御撰力を得て、此人を明らかにしたいものである。

伊藤光中は慶應時代にはすでに素性が知れなくなつてゐること、丸山氏が調べた段階でも光中について詳しいことはわからないということが述べられている。その後も光中についてはあまり詳しいことがわかつていないようである。そこで、今まで報告されている資料と今回新しく管見に入つた資料等を基にして伊藤光中の略年譜を作成してみた。

#### 【伊藤光中略年譜】

寛政四年	一七九二	1・2	伊藤祐助の嫡子として上州沼田に生まれる。(沼田市史)
享和元年	一八〇一	10・11	十歳にして山城守頼布に御目見する。(沼田市史)
文化八年	一八一二	20・21	代官見習となる(沼田市史)
九年	一八二二	21・22	江戸屋敷類焼の折、復興資金の調達に骨を折る。(沼田市史)
十二年	一八一五	24・25	日光法会勤番として調達金集めに精を出した。(沼田市史)
			静嘉堂文庫蔵『倭名類聚抄』に校

天保四年									
一八三三									
42・43									
東海大学付属図書館蔵桃園文庫本									
十二年	一八二九	38・39		静嘉堂文庫四冊十行本（松井文庫D）『とりかへはや』の三度目・四度目の校合をする。					
十年	一八二七	36・37		静嘉堂文庫四冊十行本（松井文庫史）					
九年	一八二六	35・36		家督百石を継ぐ。（『沼田市史』）					
八年	一八二五	34・35		町奉行になる。（『沼田市史』）					
六年	一八二三	32・33		新撰字鏡捷見を著す。（『補訂版圖書総目録』）					
四年	一八二二	30・31		作事奉行となる。（『沼田市史』）					
文政元年	一八一八	27・28		猪十郎と改名。（『沼田市史』）					
十三年	一八一六	25・26		作州に一年詰める。（『沼田市史』）					
				浜臣の朝敵辨（）					
				合注をつける。（丸山季夫氏「清水					

五年	一八三四	43・44	四卷四冊十行本『とりかへはや』（桃・一一・五四）を著し終える。
			七月七日、四十四歳で死去。墓は平等寺にある。（『沼田市史』）

《その他 書写・著作年次不明の文献》

- ・天理図書館蔵『朝敵辨』—伊藤光中の「朝敵弁抜粹」の記事がある。（丸山季夫氏「清水浜臣の朝敵辨」）
- ・東京都立中央図書館蔵『賢歌愚評』—「光中按」という頭注がある。（丸山季夫氏「清水浜臣の朝敵辨」）
- ・三矢重松氏蔵『源氏物語』—伊藤光中の書入がある。（『利根郡誌』）
- ・『碔石の落葉』—伊藤光中著。
- ・『源氏物語艱語考証』—伊藤光中著。
- ・『ひらめ石の長歌』—伊藤光中作。（『利根郡誌』）

西暦の下欄に算用数字で光中の年齢を記したが、二候補を併記した。これは、『沼田市史』の天保五年（一八三四）に「四十四歳で死去」を正しいとすると、寛政四年（一七九二）に生まれたという記事とは計算が合わないためである。「四十四」という記載が「四十三」の誤りと考えると上段の年齢になり、「四十四」という記載が正しく、生まれた年が誤りであると考えると下段の年齢になる。さらに、死

去した日についても、『沼田市史』では天保五年七月七日とされているのに対し、『国書人名辞典』および『利根郡誌』では、同年七月八日とされている。特に『利根郡誌』には平等寺にある光中の墓に「天保五甲子歳文月八日」とあったとされているから八日説の方が有力かと思われるが、さらに検討の必要がある。

伊藤光中の経歴に関しては『沼田市史』『利根郡誌』などの郷土資料によってある程度は明らかになるが、その交友関係についてはまだ周辺資料を発見するに及んでいない。特に静嘉堂文庫本奥書に記されたいくつもの校合本をどのような経緯で手に入れるに至ったかは気になるところである。今後、続けて調査の必要があると思う。

### おわりに

以上、静嘉堂文庫本と桃園文庫本の関係および伊藤光中についての今段階で可能な限り明らかにしてきた。

現存する『とりかへばや』の伝本はすべて写本で版本は一つも知られていない。茨城大学附属図書館蔵本の序文から、木戸千楯が賀茂季鷹を擁して出版する計画があったことは窺えるが、結局出版はされなかったようである。このような状況において詳細な系図・年立等を備え、整理された注を有する桃園文庫本の存在を考えると、この桃園文庫本にも出版の計画があったのではないかと考えられよう。光中の没年は天保五年七月七日(八日)、奇しくも天保四年七月六日に桃園文庫本を著したほぼ一年後に亡くなっている。この早い

時期の死去が原因で或いは出版する機会を逸したのかもしれない。

また伊藤光中については、上記二本以外にも神宮文庫本(1)には光中の説があり、國學院大學本(2)にも光中説の注が見られる。これらにより光中が関わった写本が当時少なからず見られていたということが窺える。『とりかへばや』諸伝本内の注記を詳細に探ればまだ多くの光中注が発見される可能性は大きい。このような状況を考える時、やはり伊藤光中の『とりかへばや』享受史における功績は大きいと思えるのである。

### 【注】

(1) 鈴木弘道氏「(第一)平安末期物語研究史 とりかへばや物語編」『平安末期物語研究』 昭和五四年 大学堂書店。

(2) 東海大学付属図書館蔵桃園文庫四卷四冊十行本『とりかへばや』(桃 一一 五四) 写本四卷四冊十行本(第一巻欠、提要

・系図・年立が書かれたもの一冊を含む)。表紙薄茶色柿渋刷染(後装)、紙表紙、本文鳥の子。袋綴。二三・七×一六・三cm。扉題「登理加幣婆也二(三・四)」。「登利加幣婆也物語」原表紙 五五

(原表紙)、首題「登理加幣婆也二(三・四)」。「青鈴書屋」「神村長豊蔵書」印他。

(3) 「取替ばや物語考」(『國文學註釋叢書(十二)』 名著刊行會 昭和四年)。

(4) 『とりかへばや』の系図に関しては、伊藤光中以前に、本多忠



憲の『とりかへばや系図』があつたことが知られている(鈴木弘道氏によると、京都大学が蔵していたが、現在は「廃棄」になつてゐらしい)。

(5) 西本寮子氏『とりかへばや』蓬萊氏本系統の伝本をめぐる考察―本居宣長の奥書を起点として―(『国文学攷』第一七八号、平成十五年六月)。

(6) 静嘉堂文庫蔵 四冊十行本(松井文庫本D)『とりかへばや』写本四卷四冊十行本。表紙藍色、紙表紙、本文楷紙。袋綴。二七・五×一八・五cm。題簽左肩「とりかへばや春(夏・秋・冬)」、首題「とりかへばや一(二・三・四)」。第一冊目のみ表紙右肩に「百十七号忍屋本」と記された貼紙がある。「松井蔵書」

「静嘉堂現蔵」印。第一冊冒頭には山岡凌明の序文がある。

(7) 『国書人名辞典 第三卷』(岩波書店 平成八年)による。

(8) 片寄正義氏「とりかへばや物語の基礎的研究」(『国語と国文学』昭和十三年五月)。

(9) 石川雅望系統の奥書を持つ写本は、静嘉堂文庫本の他に二本見られる。一本は丸山季夫氏の注(15) 掲出論文において「丸山云、雅望自筆本今国学院大学二蔵ス。朝倉治彦氏示教」と記されている國學院大學蔵本と、片寄正義氏の前掲注(8) 論文における静嘉堂文庫本(B)にあたる。しかし、前者の國學院大學本においては、「寛政十三年庚申正月 石川雅望」の「石川雅望」の部分が墨で塗りつぶされている。また、同本が明らか

に取り合わせ本であること等を考え合わせると、容易には石川雅望自筆本とは断定しがたいように思う。また、静嘉堂文庫本(B)においては、「登利加邊婆也四卷寛政十三年庚申正月」までしか奥書はなく石川雅望の名は書かれていない。このため石川雅望自筆本とは言い難い。或いは静嘉堂文庫本(B)は、國學院大學本に名前が墨で塗りつぶされていることを考えると、直接的な親子関係ではないにしろ國學院大學本から派生した可能性も考えられる。また、二本ともに「寛政十三年」となつているのも注目に値する(静嘉堂文庫本では「十三」と書かれた上に「十二」と重ね書きされている。いつの段階で重ね書きされたかは定かでない)。この箇所は、「庚申」であるならば寛政十二年が正しい。しかし、静嘉堂文庫本も当初は「十三年」と書写されていたと思われるので、現存する石川雅望系統の奥書を持つ写本はすべて寛政十三年という記載を持つことになる。これらを考えると、なお考慮が必要ではあるが、やはり石川雅望自筆本は散逸、或いは未だ報告されていないと考える方がよいであろう。

(10) 泊泊舎蔵本は実践女子大学蔵黒川文庫に下巻のみ所蔵される。静嘉堂文庫本三・四巻の「ハ」と明記された校合跡および注はこの実践女子大学蔵本の本文および注とほぼ一致する。

(11) 静嘉堂文庫本の奥書からは、千村仲雄は森嘉基の校合の確認作業を行ったと解釈できる。しかし『とりかへばや』諸本中、

千村仲雄の奥書を持つ写本は五本（うち一本散逸）存在する。それら五本は、すべて「文政四年正月廿日」という同年同日の記載を持つにも関わらず、文脈や經由した人物の差異などにより四種類も存する。そのため、静嘉堂文庫本の奥書では上記のように解釈できるが、諸本全体を見ると「文政四年正月廿日」に千村仲雄が確認作業を行ったのか、或いは他本を用いて校合したのかは容易に判断できない。

(12) 文化六年（一八〇九）生、明治十七年（一八八四）一月三十一日没。七十六歳。伊勢に生まれる。外官神官。足代弘訓に国学・和歌を学び、河崎恪斎に漢文を学ぶ（『国書人名辞典 第二巻』（岩波書店 平成七年）による）。

(13) 天明四年（一七八四）十一月二十六日生、安政三年（一八五六）十一月五日没。七十三歳。荒木田久老に入門。芝山持豊に和歌、本居太平に国学、本居春庭に国語を学び、本居学派の中心的存在となった（『国書人名辞典 第一巻』（岩波書店 平成五年）による）。

(14) 『名家伝記資料集成 第一巻』（森繁夫氏 思文閣出版 昭和五十九年）。

(15) 『絳石の落葉』の著者が伊藤光中であること、静嘉堂文庫本の書写者が伊藤光中であろうということは、すでに丸山季夫氏の論文に（指摘がある）「清水浜臣の朝敵辨」『典籍』第五冊昭和二十七年十二月）。

(16) 『沼田市史 通史編 2 近世』（沼田市史編さん委員会 平成十三年）。

(17) 『利根郡誌 後編』（利根教育会 昭和五年）。

(18) 静嘉堂文庫本巻一、十三丁表の「たとしへなく」の頭注に、「猶おのか物したる源氏物語観語考証にこの類の詞ともくはしく注せり」とある。

(19) 神宮文庫蔵三冊十一行本見返しには、「上野沼田伊藤光中<sup>中</sup>ハハコノ物語ノ哥風葉集ニミエタレハ狭衣ヨリハ後風葉集ヨリハ前ノモノ也ト云リ」とある（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムで確認）。

(20) 國學院大學本には、「光中按く」という頭注が朱および墨で巻一、三、四に見られる。

〔付記〕資料の閲覧をご許可下さった静嘉堂文庫、東海大学付属図書館、國學院大學、実践女子大学図書館に、記して厚く御礼申し上げます。

——あらい・かずみ、広島大学大学院博士課程前期在学——